

白糠の アイヌ語地名

第8回

○チカヨツプ

「チカヨツプ」は、刺牛と西庶路の境にある地名で「チカ（魚のチカ）・オプト（川口）」というアイヌ語から「チカが群がっている川口」と訳されています。

チカは、道東では4月から5月が産卵期で、川水が海に流れ出る塩分の低い砂地の浅瀬で産卵します。そのようすがこの川口で見られたことから「チカヨツプ」という地名がついたもので、こうした生き物の営みもアイヌ語地名の由来となっています。

アイヌ語辞典を引くと、チカは「トキカラ」と呼ぶのが一般的のようですが、方言としていくつかの呼び名があります。

アイヌ語研究に尽くされた、アイヌ民族の言語学者知里真志保博士は、著書の『分類アイヌ語辞典 植物・動物編』の中で、白糠では「チカ」と記しています。

〔出典『知里真志保著作集』別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物・動物編〕

○オンネチカオプ川 （オンネチカツプ川）

チカが群がっている川口があるのが「オンネチカオプ川」です。

「チカオプ（チカヨツプ）」に大きいという意味の「オンネ」がついたもので、「大きいチカオプ川」という意味です。



オンネチカツプ川

「オンネ」は、小さいことを表す「ボン」と対で使われることが多く、近いところに大小2つの川があったことを示しています。古地図を見ると、オンネチカオプ川と西庶路駅の間には「ボンチカオプ川」の記載がありますが、現在ではその川を見ることはできません。

◆「アバシリ越」新道

松浦武四郎が著した『東蝦夷地誌』のチカヨツプ（日誌では「チカヨフ」と記載）のところに「此處文化度開きしアバシリ越新道の入口跡あり。」という記述があります。

この新道は、幕府が蝦夷地を直接支配していたころ、白糠に詰めていた幕府役人の大塚惣次郎が、1808年（文化5年）に開削を始め、1810年（文化7年）に開通させました。

チカヨツプを起点に、阿寒の舌辛を経て阿寒湖西岸をとおし、釧北峠を越えて網走の新栗履（今の藻琴）に至る全長46里（約180キロ）に及ぶもので、現在の国道240号のもとになったとも言われています。

しかし、蝦夷地支配が松前藩に移った1821年（文政4年）、

藩によって通行が止められ、その後は使われることなく自然に消えてしまいました。

白糠村時代の歌人・郷土史家小助川濱雄も『釧路国蝦夷時代史』の中で新道のことについて、大塚惣次郎が開削をはじめた前年の1807年（文化4年）、大塚はこの路線を調べるとともに、馬を斜里、宗谷、天塩、苫前、留萌に送り、宗谷のアイヌの人たちに大いに喜ばれたと記しています。

このように、チカヨツプは「白糠のアイヌ語地名」が述べているとおり「歴史的にきわめて由緒ある土地柄」なのです。



この奥に網走へ続く道があったと記されている